

「キリストを求めて生きる」

詩篇
ピリピ人への手紙

第42篇1節～5節
第2章19節～30節

説教 岡村 恒牧師

「人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めていない。」(21節) 聖書はこのように、私たちの姿を描き出します。私たちは、本当に求めるべきものを悟らず、無くてならぬものを知らずに歩んでいます。

今日は、一人の兄弟のご遺体を聖堂に安置してこの礼拝を守っています。聖日の礼拝は、主イエス・キリストのご復活を祝う祭りです。主イエスが今も生きておられるので、主にあって眠りについた者もやがて終わりの日、死の床から引き上げられ、神の国に迎え入れられます。代々の教会は、死の眠りについた者を、礼拝において葬ってきました。死を打ち破って生きておられる主の御言葉を聞くことなしに、愛する者を葬ることなどできないからです。

前夜の祈りの式や葬儀において、私はいつも故人の人生を振り返りながら、神がこの兄弟や姉妹にいったい何をして下さったかを丁寧にたどるようにしています。今朝の御言葉も同じような調子で書かれています。きわめて個人的な書き方で、テモテをピリピ教会に送る予定であること、それに先だってエパフロテを送る目的などについて記されています。「それは、あなたがたの様子を知って、わたしもかづけられたいからである。」(19節)と記されていますが、「かづけられたい」というのは、元気になるとか喜ぶという意味の言葉です。遠く離れ、もしかしたら死刑になるかもしれないパウロですし、ピリピは激しい迫害の中にありますが、それでも、神が与えて下さる喜びと一緒に味わいたいのだ、と呼びかけるのです。

今日の午後の葬儀では、故人が10年余り前に選んだ聖書箇所を読みます。今、一緒に読み進んでいるピリピ人への手紙の少し後ろの方、4章4節から7節の御言葉です。「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」(4章4節) 不思議な仕方誕生したピリピ教会(使徒行伝16章)の人々のことを思い起こしながら、この手紙は繰り返し「喜びなさい」と呼びかけます。どこを探しても、喜びの種すら見いだすことができない現状に直面しながら、愛する者の遺体を前にしながら、それでもなお、いや、だからこそ、まことの神に目を向けたいと言うのです。神が、あなたのためにいったい何をして下さったかを、今、ここで思い起こし、神の恵みを数え上げてみたら良いと言うのです。

パウロは、自分が語り続けてきたことを思い出して欲しいのです。神のひとり子、主イエス・キリストが人となって地上に来て下さった目的、地上で何を語り、何をして下さったか。神のひとり子が、その命を与え尽くしてまで、私たちの罪の赦しを実現して下さったことを思い起こして欲しいのです。そうして、なお一緒に喜んで歩みたいのです。

しかし私たちは、「練達」したテモテのように、信仰の道を歩み続けることができるのか、と自分自身に問いかけたくくなります。聖書によれば、「義人はいない、ひとりもない。」(ローマ人への手紙3章10節)のです。私たちは神の前に立ち続けることができません。必ず失敗し、挫折を経験します。喜び続けて歩みたいと願いながら、小さな悲しみの種や恐れに気づいた途端、喜びが吹き飛んでしまいます。

目に見えるものはすべていずれ崩れ落ちることになります。私たちはこの現実を前にして、自分の力で本当の喜びを手にし続け、喜んで歩み続けることなどできません。ただ、神の恵み、神の憐れみによって私たちは歩むことができます。神が差し出して下さる喜びを繰り返し受け取り直ししながら、ただ神の力によって歩むことができるのです。

テモテのことを〈練達〉したとパウロは記しています。これはローマ人への手紙5章3節から5節にも出てくる言葉です。患難の中で忍耐が与えられ、忍耐が練達を、練達が希望を生み出すという言葉です。神が与えて下さる苦しみは私たちに忍耐を与え、練り上げて希望を抱く者として下さる。そしてこの希望は、失望に終わることはないのです。一人一人にふさわしい仕方、神は信仰への導きを与え、確かな希望を与えて下さいます。だからパウロは、テモテの練達ぶりと口にしながら、ただ神のみ業にだけ目を留めています。神が信仰を与え、希望を与えて下さるので、私たちは、どんな時も、喜んで歩むことができるのです。

一人の兄弟を葬りながら、私たちは終わりの日を望み見て希望を抱き、神を讃美します。主の再臨は近いのです。このお方を救い主と信じるなら、誰でも、自分自身の死を目の前にしても、奪い取られることのない希望を握り締めてなお喜び、神を誉め称えて歩むことができるのです。

(記 岡村 恒)